

化成肥料が本格的に初めて売り出されたのは昭和2年であった。

昭和13年には、配合肥料が120万トン、化成肥料が50万トンにもなった。しかし戦争の進行とともに、種々の制約を受け減産し、遂に生産を止めるにいたった。

戦後、肥料の生産が増加し、統制が徹廃されるとともに、配合肥料・化成肥料の生産消費は急増した。特に化成肥料の増加は激しかった。

他方、化学肥料の価格は他の物価の値上げの中で値下りし、また日本経済の急速な伸長に伴って、農村の労働力は他産業に流れ、労賃も大巾に値上りした。ために合理化による少しばかりの肥料費の節約より、労働力の節約がより重要となっ

た。

このことは、年々著しく増加してきた化成肥料の、銘柄の整理統合の方向に動いてきた。

すなわち作物の生育に敏感な窒素に重点をおき、燐酸や加里は多少余計目にする事になった。

これが労働力をも加味した新しい施肥合理化の方向になった。

しかし昨年暮からの世界的な天然資源の不足気味から、資源を全く持たない日本は、また原点に戻って考え直さざるをえなくなった。

今までと全く異なる複合肥料が施肥法の革新とタイアップして、登場しようとしている訳である。

## 10月15日現在の 水稻は“やや良”

山中臨時農相代理は11月1日の閣議に、49年産米の収穫量が10月15日時点の最終予想で、水陸稲合計して1,228万3,000トンに達しそうだと報告した。

この収穫予想量は東北、関東を中心としたイモチ病などの発生で、前回予態(9月15日現在)の1,235万8,000トンを76,000トン下回っているが、48年産米の収穫実績を1.1%上回る。

また10a当り収量も455kgで、これも48年の470kg、47年の456kgに次いで史上3番目の記録を確保、作況指数も102の“やや良”で、47年以来3年続きの豊作になることがほぼ間違いないと予想されている。

49年産米は、49年度になって休耕奨励金の打ち切りなどで減反規模が縮小し、作付面積は267万5,000haと前年に比べ2.0%拡大した。

10月15日時点の収穫予想は9月になって東北、関東、東海などの各地方で穂イモチ病やウンカが発生し、その影響で、前回予想よりも収量見込みが若干減っているのが特徴であるが、致命的な被害になっていない。

この結果、予想収穫量は水稻1,217万4,000ト

ン、陸稲10万8,000トンの合計1,228万2,000トンと、本年の目標だった1,215万トンを132,000トン上回る豊作が見込まれている訳である。

なお、地域別にみた作柄は、東海の一部で穂イモチとウンカが多発したため、それぞれ2ポイント低下、東北99(平年並み)、関東・東山98(やや不良)、東海99(平年並み)となり、たま北陸(105)、中国(104)、四国(101)、九州(103)はいずれも前回調査並み、沖縄は1ポイント上昇して100(平年並み)となった。

なお陸稲は干ばつの被害も少なく、114で“良”の作柄である。

例年なら“もみじと酒”……ということ  
あとがき  
ろですが、この頃のように“食糧問題”  
が国際的いや地球人類にとっての大問題化すると、  
“もみじと酒”どころではありません。

折角、ローマでは11月5日から12日間にわたり国連加盟各国から閣僚級人物が参集して、世界食糧会議が開催されておりますが、この会議に寄せられる各国の期待以上に、いわゆる開発途上国や産油国側の意向が激しく、アメリカが提唱する“食糧備蓄計画”なども、どうやら結論を得ましたが、食糧問題の帰すうは全く予断を許さなくなりました。

これからは恐らく、いろいろな情報が流されることと思いますが、いわゆるデマに迷わされることなく、出来る限り慎重に事態を見きわめて善処致しましょう。急がば廻われ……です。(K生)